



～ プロンプトから自立へ (つづき) ～

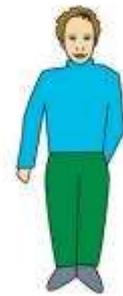
1 「起立」といったら

朝の会や授業の始まり、または終わりに「起立」と日直や先生が号令をかけたならば、一回で椅子から立ち上がることが、合図に正しく反応した行動、すなわち自立となります。では、「起立」という合図に正しく反応できない場合、どのようなプロンプトを皆さんは考えますか。

すぐに行動に移すことができない子どももいるので、少し黙って待つことも大事なことだと思います。それでも起立しない場合にはプロンプトをしなければなりません。

子どもが立つまで「起立」の号令を何回か続ける。「〇〇さん、号令がかかったよ」、「〇〇さん起立しようね」と言葉かけをする。これらは「言語プロンプト」を用いた例となります。仮に何回目かの「起立」や「〇〇さん、号令がかかったよ」という言葉かけで椅子から立ち上がったとします。これは自立した行動といえるかということ、もちろんそうではありません。合図は、あくまでも最初の「起立」のみです。また、何回も「起立」と言われたり、何かしらの言葉かけをされたりすることが続くことで、最初の「起立」の後に何かを言われてから立ち上がるのだと学習してしまう可能性があります。そしてこれが、「プロンプト依存」や「指示待ち」にもつながっていくこととなります。

たつ



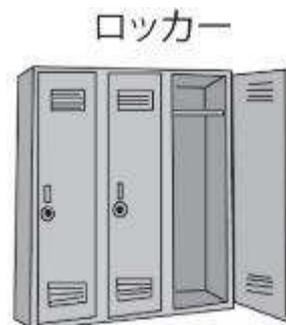
私がよくやってしまうことに、「起立」の号令の後に立ち上がらない子どもの目の前で、上向きした手のひらを上げることがあります。これは「身振りプロンプト」になりますが、これを続ければ当然「起立」の号令で立つのではなく、手のひらを上げた動作を見たら立つのだということを学習させてしまうこととなります。

「起立」という合図に正しく反応できるようになり、なおかつプロンプト依存にならないようにするためには、「起立」に合わせて立つことを促すように背中を押すなどの「身体プロンプト」が有効であると思います。立つことにつながる動作が出てくるのに合わせて、押す力加減を弱くしていったり、背中に触れる時間を短くしたりしてプロンプトを徐々に抜いていくことを行っていきます。また、この起立の場合、体が大きくなると身体プロンプトが難しくなることも考えられますので、早い段階で身につけることも大事になってきます。

ここで確認ですが、「身体プロンプト以外はだめだ」ということではなく、それ以外のプロンプトは、プロンプトを抜きづらいののでしっかりと計画や準備をして行わなければ、プロンプト依存になってしまいやすいということです。

2 日々の取り組みから

高等部のB君は、衣服の前後を間違えたり、ボタンをうまくかけられなかったりと見守りや一部介助は必要ですが、おおむね衣服の着脱は一人で言うことができます。しかし、彼には一つ問題点がありました。着替えの途中で、感触を味わっているのか、においを嗅いでいるのかはわかりませんが、衣服を鼻先に持って行ってそのまましばらくじっとしていたり、なにもしないで目をつぶったままじっとしていたりするので、着替えにとっても時間がかかっていました。



そこで、スムーズに着替えができるよう、B君の着替えの際に「身体プロンプト」を用いることにしました。今の時期であればB君はジャンパーを着て登校してきます。なので、着替えの第一歩はジャンパーを脱ぐことです。すぐ脱ぎ始めない場合、無言で利き手を持ち、引き手まで運び持たせます。そこで止まったままなら、利き手を持ち下に動かします。そうするとたいていはファスナーを開けるところまでは止まらずに行うことができます。次に下に降りた手を持ち肩のところまで持ち上げジャンパーを脱ぐ動作を促します。

このように、服を脱ぎ、ジャージなどに着替え終わるまで無言で、そして、途中で衣服を鼻先に持っていったり、動きが止まったりしないよう（そのような動きが入らないよう）B君の手を動かして次の動作を促すプロンプトを約2年続けました。その結果、まだ他の生徒に比べれば時間はかかっていますが、途中で着替えとは関係のない動作は減り、プロンプトも減り、だいぶスムーズに着替えができるようになりました。

「自立とプロンプト」については今回で一区切りつけたいと思います。

ところで皆さんは第1版に登場した「かっこいいね」のA君のことは覚えていますか。「かっこいいね」に応じないで次の行動に移らせるために私がとった対応は、プロンプトとは違う方法であり、かつ応用行動分析的な視点での学習支援ではとても大事なこととなります。

次回からじっくりお伝えできればと思っています。【4月発行第4版に続く】

参考：PECS トレーニングマニュアル第2版

カット：Pics for PECS 第15版（掲載許諾済み）